

『上海日日新聞』に見る満洲事変前夜

— 宮地貫道の予見を中心に —

【サマリー】

木村 実季

『上海日日新聞』は、1910年代から1930年代にかけて、上海の日本人居留民に読まれていた邦字紙のひとつである。その『上海日日新聞』を創刊した人物が宮地貫道（みやじかんどう）である。宮地は、上海の日本人居留民社会における有力紙の社主であり、また一流の言論人であったにもかかわらず、その人物はあまり知られてはいない。

知られていない理由のひとつは、日本は満洲よりも上海の権益を守るべきだとする宮地貫道の持論が、「満蒙は日本の生命線」だとする当時の日本の世論に受け入れられなかったからであろう。

その宮地貫道の言説を1931（昭和6）年1月の『上海日日新聞』紙上に見ることができる。それは「満蒙問題と日支外交の前途」と題する宮地による署名記事においてであるが、この記事の中で、宮地は満洲を舞台に日中が衝突することになると予見していた。

この「満蒙問題と日支外交の前途」が掲出された1931年1月は満洲事変の前夜ともいえるべき時期であるが、この時期の日中関係はいかなる情勢にあったのだろうか。

本稿では、宮地貫道が満洲事変の勃発を予見した、1931年1月の状況を『上海日日新聞』から読み取った上で、宮地の言説を紹介したい。